



## 目次

### ●特集1>> 観月会

\* 02 報告 … 新田由美子／渡辺礼比子／鹿取未放

\* 04 詠草

### ●特集2>> 新春歌会

\* 06 報告 … 福原捷子／中村規子／俵谷晴子

\* 08 詠草

\* 05 新入会員自己紹介 … 高橋律子／千田政子

\* 09 会員作品

深志聖子／松井芳子／渡部洋児／結城千賀子

堀部知子／渡辺 謙／平尾 眞／宮下俊博

\* 10 エッセイ … ロビンソン・クルーソー——井澤幸恵

\* 11 会員著書紹介 … 結城千賀子歌集『微笑』&『蜻蛉文』

\* 11 編集後記

## 特集1 観月会

### —久しぶりのKKR。ポートヒル横浜

[日時] 2016年10月16日(日)  
歌会: 14:00~16:45  
懇親会: 17:00~19:00  
[会場] KKR ポートヒル横浜 (横浜市中区)

久しぶりのKKR ポートヒル横浜での観月会。満月の日に日程を決め、お月様に会えることを念じながら当日を待ちました。

#### ●観月会に参加して——新田由美子

平成二十八年十月十六日、横浜歌人会恒例の観月会が秋バラ香る港の見える丘公園に隣接したKKRポートヒル横浜内で開催された。当日は好天に恵まれた日曜日の上にいくつかの結社の会と重なり、出席者は例年より若干少ない三十三名であった。

歌会とは三階ル・シエルで午後二時から始まった。工藤こずゑさんの開会宣言のあと、吉野裕之代表委員の挨拶があり、三枝むつみさんの司会で、当日欠席者分を除いた三十三首について席順に従って一人一人による丁寧な心のこもった歌評がなされた。その後第二評者の宮下俊博さん、渡辺礼比子さん、嵯峨直樹さん、高橋みずほさん、藤田絹子さんが更に異なった視点から意見を述べられ、最後に高尾文子さんが一歩踏み込んだ総評でしめくられた。

歌の中には、身近な者(物)を詠ったものは勿論のこと、亡き人を悼む歌、旅先での感慨、世界を俯瞰し、平和を願う歌など多岐にわたる力詠がそろった。

その中で「ここまでもオスマン版図は及びけりいま新月旗もてる国ぐに」の歌に焦点があてられ、そもそかもオスマン版図とは。新月旗をもてる国ぐにとはどこ

を指しているのか。オリンピックの旗との関連は？などオスマンについての会員の理解力を試されているようで議論が深まり、興味が尽きなかった。

吉野代表委員以下スタッフの方々の心配りのもと予定より早く終了。あとは四階のラ・メールに席を移しての懇親会へ。

帰途、真円のみごとな月が足元を照らし、横浜歌人会のまどかなる行末を予祝しているとの思いに充たされ、家路についた。

#### ●海の月の出——渡辺礼比子

十月十六日、港の見える丘公園のKKRポートヒル横浜で、今年の観月会は開催された。満月にあたるこの日は朝から晴天、しかも会場が月の出を眺めるには絶好のポイントとあって、誰もが期待に胸を膨らませた。

まずは工藤こずゑ氏が開会の辞を、続いて吉野裕之氏が代表委員挨拶をされた後、いよいよ歌会となる。司会とは三枝むつみ氏。月を読み込んだ出詠歌が大半をしめたが、社会詠あり、叙景歌あり、心象詠ありで三十八首はバラエティに富んでいる。参加者を5つのグループに分け、各グループの第一批評の終わったあ

と第二評者がコメントを加えるという方式は例年通り、第二批評は、宮下俊博、嵯峨直樹、高橋みずほ、藤田絹子の各氏と渡辺が担当した。内容はといえば、「助詞、表記、音韻の響き、文法、口語と文語、類似歌についてみなさん丁寧に批評した」と述べられた高尾文子氏の総評に尽くされていよう。ディスカッションでは「文法を無視するわけにはいかない」という意見に対して、「文法的に正しいかどうかではなく、その作品の持つ世界をどう豊かに受け取るかが大事なところではないか」という発言があり、強く印象に残った。鑑賞、批評そのものについて念入りな討議ができるのは、コンテスト形式ではない、こうした歌会のメリットであることも再認識したことである。

懇親会の乾杯後まもなく、海の上に薄紅の大きな満月が上り、会場に歓声があがった。今年も真鍋正男氏の望遠鏡から、クレーターさえ見えるくきやかな月を覗かせて頂くことができたのは有難い。新人の岩井幸



歌会の司会是三枝むつみさん

代氏、松平盟子氏の自己紹介の後、原昌子氏が、三月に逝去された角宮悦子氏の思い出を語られ、この会を愛し、尽力された故人を偲んだ。

会が盛会裏に終わったのは、席をあたためる暇もなく、濃やかに気を配って下さったスタッフのみなさんの御蔭である。ありがとうございました。

#### ●朗らかな満月——鹿取未放

昨年入会し、今年は二度目の観月会。歌会、懇親会ともトランプで席を決める方式がユニーク。知らなかった方と食事が終わると旧知の間柄のようになっていてトランプ方式のすばらしさを実感した。

歌会は吉野裕之代表委員の挨拶で始まり、司会是三枝むつみ氏。結社と違い傾向の違う広範な詠草が並び、席順に一通り批評した後、第二批者（宮下俊博、渡辺礼比子、嵯峨直樹、高橋みずほ、藤田絹子）、質問や意見、まとめ（高尾文子）と何段ものステップがあり、鑑賞も深まり厚みのある本質的な議論が展開された。

例えば、歌の中のある言葉の指す内容は二通り考えられて特定しにくいという意見が出た。そういう場合、議論して特定する結社と様々な解釈を許容する結社があるらしい。しかし「いかに豊かな鑑賞ができるかが読み手の責任」という吉野氏の発言にいたく同感したのだった。

A この町に月が来ている喜びをあなたはそつとパンに挟んだ  
吉野 裕之  
B ここまでもオスマン版図は及びけりいま新月旗も  
野一色 容子  
C 霧の道を一瞬光り折れゆけりトラックに月毛が揺  
れてあたのだ  
三枝むつみ



懇親会（新入会員の自己紹介）

歌会で話題になったり好評だった三首。Aは、下句に謎があるところが面白く、全体の口語調が効いている。Bはオスマン帝国の征服の歴史と、以降世界に散らばった新月旗を持つ国々の厳しい現状を思わせられた。Cの「月毛」はクリーム色の馬だが月の採り入れ方もうまく、映像的に美しく歌に奥行きがある。〈逢坂の関の清水に影みえて今や引くらむ望月の駒・紀貫之〉〈逢坂の関の岩かど踏みならし山たちいづる霧原の駒・大弐高遠〉などの古歌を遠く呼び起こす重層性があると思った。

懇親会の司会は工藤こずゑ氏。永平緑氏が観月会にふさわしい梟の帯を締めて乾杯の音頭をとられた。工藤氏のテンポのよい司会で宴は進行し、やがてベイベリッジの上にオレンジ色に輝く大きな満月が朗らかに昇ってきたのだった。

# 詠草

・水汲むと深夜の列に並び立つ九歳なりき 月を仰ぎて 津波古勝子  
 ・幼児の画きたる我は月のごと丸き顔より手足生えおり 朝井恭子  
 ・年々変わる人の輪満月の光のなかに面影しのぶ 野崎美智子  
 ・草叢と化した庭に月明りほの白く咲く民さんの花 半澤敏子  
 ・真夜に見る真白き月は滲んでく あれあれわたし泣いてゐるんだ 中川宏子  
 ・高みから郷一面にぶどうだな期間限定パラダイスかな 福原捷子  
 ・反抗期中二の孫がひよいと来る焼肉食はせ盆玉渡す 藤田絹子  
 ・夕月の高圧線にかかりをり家並みの赤く燃えてゆく 後藤恵市  
 ・新月のけふ降る雨に外灯のこもりて照らす闇への知方 宮下俊博  
 ・上京して疲れたる身にやさしけれ車窓より見し金の三日月 土屋美代子  
 ・強風のひと日荒れたる空清く星きらめけり無月の今宵 河北笑子  
 ・透かしつつためらひつ薔薇酒飲みほさば悲しみ喉を逃げ道とせり 永平 緑  
 ・ケアンズの旅先に見し宵の空さそり座ひくくアンタレス光る 竹内芳恵

・あの月を自が領土とぞ奪ひ合ひミサイル飛び交ふ秋の夜の夢 高橋庚子  
 ・ここまでもオスマン版図は及びけりいま新月旗もてる国ぐに 野一色容子  
 ・死を食むのではなく殺めて食むことを教わりきて二年生のだんまり 池谷しげみ  
 ・稿成らん目途つきし夜を窓辺より半月のぞく冴え冴えとして 渡辺礼比子  
 ・縁側に薄芒を供え子供等と満月を仰ぎし過の日浮かびぬ 下田聰子  
 ・あのあたり月は出づると見る空の夜靄の向うまるく明るむ 工藤こずゑ  
 ・まれびとのホモサピエンスの足あとを紋章として輝るや満月 高尾文子  
 ・月影に鈴虫の音のひびき草々のしだれにおちるよ滴 高橋みずほ  
 ・見上げたる遠く夜空の仄明しこの窓すぎて月のあるらし 葉山昌子  
 ・わが生日観月会と重なりて風に色ある宵となりゆく 新田由美子  
 ・おもはざるに夕ベスパーに買ひたりき大和吉野の柿の葉壽司を 小川俊子  
 ・かの世から祈りの届く月の夜半すすきの原は光の海に 岩井幸代  
 ・月の環は虚空に白く熟れながら涙に焼けた環と重なり 嵯峨直樹  
 ・振り向けば月の照らせる蓮池に風のわたりて触れあふ音す 小南紀子  
 ・この町に月が来ている喜びをあなたはそつとパンに挟んだ 吉野裕之  
 ・供うもの何もなければ病む身には上る名月窓に迎えり 塚田キヌエ

・二十三夜の月まだ明るし病むといふ君を思ひて眠れぬ夜の 山本登志枝  
 ・暮れきらぬ九月の空の半月にすこし離れて夕焼くる雲 井澤幸恵  
 ・近視に遠視乱視が混じりおぼろかなり輪郭鋭き筈の三日月 真鍋正男  
 ・入り混じり死者も生者も楽しめる盆の踊りを月も親しむ 深志聖子  
 ・月あかし伊豆のワインに下戸酔うて露天湯にひとり唱ひいづるも 鹿取未放  
 ・あなたの骨眠りし相模の夜の海あまねし青き月の光は 原 昌子  
 ・平成の縄文坂に月照れる古代をとめも物思ひしや 田代弥生  
 ・霧の道を一瞬光り折れゆけりトラックに月毛が揺れてゐたのだ 三枝むつみ  
 ・月読のひかり冴え冴え 胡蝶舞ふシテを照らしてわれを照らして 平賀富美子



素敵な満月を見ることができました



●新入会員自己紹介

高橋律子

この度、横浜歌人会に入会させて頂きました。昨年、『硯の海』という第一歌集を出版し、高尾文子先生より薦められたことがきっかけです。

私は、「かりん」に入会して、三十年ほどになります。祖母の影響により作歌を始め、その年月には、人生の上でも様々の変化がありました。

短歌と共に、書道に出会い、又、源氏物語のようなすばらしい相聞が詠みたい、そしてその作品をかな文字で散らし書きしたい、とも思うようになりました。書と短歌によって、喜びは大きくなり、悲しみは救われていきました。

現在、私は、県内の小学校で、図書館司書をしています。短歌や書道との両立はたいへんですが、子らを通して世の中を知り、うたも生まれたりします。

・書道にて命を大切にとふ大家その高みまで吾も昇りたし

・くそばあと言はれたこともあるけれど年末年始子らが気になる

・我よりも平々な人多かれど退屈しない半生なりし最近の作品です。わかりやすいうたと歌会などで批評を受け、重厚かつ味のある魅力的なうたを詠めたら、と反省しつつ、希望を持っています。

皆様の熟達したすばらしいおうたに触れ、初めての新年歌会は、実り多いものでした。どうぞよろしくお願いたします。

●新入会員自己紹介

千田政子

「短歌」を始めて二十五年になりました。自分史を書きたいと思いはじめていた頃の一九九一年の秋、初めて短歌に出会ったのがきっかけです。そして自分史の表現は「短歌」ですと決めました。翌年の春「短歌研究」の四月号で馬場あき子先生に五首の内三首も選歌して頂いたことがきっかけとなり結社「かりん」へ入会させて頂きました。早いもので二十五年になりました。

その後、二〇〇一年十二月、第一歌集『白い自転車』を上梓いたしました。発行所、(株)角川書店。それ以後は、一人暮らしの姉の介護が十年間続き二〇〇九年の春見送りました。ほっとする間もなく夫が二年間の闘病生活の末、二〇一三年十一月に永眠致しました。夫亡き後、満三年が過ぎ最近やつと私は、心の病から立ち直る気配で前向きに歩みはじめたところでございます。

第一歌集上梓から早くも十五年が過ぎてしまいました。昨年の夏に喜寿を迎えたのでこれを機に第二歌集をまとめたと思っています。

どうぞよろしくお願い致します。その他の趣味は、庭の草花を愛でること。スポーツ観戦（サッカー）などです。

今後共、ご指導よろしくお願い申し上げます。

\*会報バックナンバーのご案内

▼第115号（二〇一六年十二月十五日発行）

第22回研究会 中野幸一氏講演会「源氏物語のこ  
とばと表現——源氏物語の訳を終えて」

文学散歩・即詠歌会報告…河北笑子／塚田キヌエ  
会員作品…桜井健司／大橋 弘／半澤敏子／小寺  
敦子／小南紀子／窪田司郎／後藤恵市／山本登志  
枝

▼第114号（二〇一六年四月二十日発行）

新代表委員・副代表委員・運営委員挨拶  
角宮悦子さん追悼…高橋みずほ

研究会報告Ⅱ篠笛を聞く…川井怜子／小島熱子／  
三枝むつみ／中村泰子

新春歌会報告…藤田絹子／竹内芳恵

▼第113号（二〇一五年十月二十三日発行）

文学散歩・即詠歌会報告…後藤恵市／野一色容子  
／山本登志枝

観月歌会報告…宮下俊博

エッセイ 横浜・行きつけの店Ⅱ…大久保晴雄／  
荒川とよ子／堀部知子

評論…人間の尊厳をはみ出すもの——介護の歌／鹿  
取未放

塩野崎宏さん追悼…千々和久幸／平野久美子

会報のバックナンバーは、横浜歌人会のホー  
ムページからダウンロードできます。  
<http://yokohama-kk.artcoocan.jp/>

## 特集2 新春歌会

### ——今年も馬車道十番館で

[日時] 2017年1月29日(日)  
総会: 13:00~13:40  
歌会: 14:00~16:40  
懇親会: 17:00~18:50

[会場] 馬車道十番館(横浜市中区)

総会の議長は高尾文子さん、歌会の司会は山本登志枝さん、懇親会の司会は田村元さん。有意義な半日でした。

#### ●新春歌会に参加して——福原捷子

ゆったりとして凌ぎやすい日であった。昨年と同じレトロな馬車道十番館で、総会の後、午後二時より歌会が開催された。

出詠数は当日一首追加され四十四首、欠席は六名であった。歌会は今回も席順に従い一首ずつ歌評を行い一巡のあと第二評者として、三枝むつみさん、桜井健司さん、高尾文子さん、新田由美子さん、後藤恵市さん、嵯峨直樹さんの六名がそれぞれに評した。

・うるわしき沖繩の青空ゆさぶりて未亡人製造機オス  
プレイ飛ぶ 津波古勝子

・バラク・オバマの二羽の折りづる翔び立てよ七十一  
年前の空まで 高尾文子

右の二首については、さまざまな意見が出され、議論は尽きなかったが、いずれも平和への強い願いを込めた歌であった。

・しめ飾りもとめてさがす橋たもと橙めぐる鳶の指先  
高橋みずほ

右の一首は、やや難解な歌として取り上げられた。橙、鳶、鳶職、指先に読者は翻弄される場面もあり、大いに盛り上がった。

質問の時間もたつぷりとられ、表記についてそれぞれが思い思いに意見を述べた。

全般を通して、作品の読み方については、作者の意図を離れ、読者にゆだねられることで、新たな発見がうまれ、加えて歌の幅も広がるのではないかということ学んだ。

歌会は、司会者の手際よい進行で、四時四十五分に終了した。議論百出で和やかな歌会であった。

#### ●新年歌会感想——中村規子

一月二十九日、今年も馬車道十番館へ来た。一時から総会が始まった。議長は、高尾文子さんで、昨年の事業報告、決算報告、会計監査報告とスムーズに行われた。次に今年度の事業計画、収支予算案が、発表された。五月頃予定の文学散歩、七月頃予定の研究会に關しては、どちらも案が、三案示され、私達にも、これ以外に良い案はないかと問われたのは印象的であった。かつて、千々和久幸代表が唱えられた「戦鬪的に学び、小鳥のように遊ぶ、世界で最もエキサイティングな会」という路線が守られていると思った。同時に、委員の方々にだけ頼っているのではなく、会員が皆、委員の方々に協力出来るよう考えなければならな

いのだと悟らされた。

歌会は、席順に批評した後、七、八首ごとに第二評者が、まとめて批評するという最近のやり方で進行了。第二評者は、三枝むつみ、桜井健司、高尾文子、新田由美子、後藤恵市、嵯峨直樹の五名であって、行届いた批評がなされた。

話題になったのは、津波古勝子作「うるわしき沖繩しまの青空ゆさぶりて未亡人製造機オスプレイ飛ぶ」であった。オスプレイは、事故が多い。これが未亡人製造機であったこと、アメリカの恥と呼ばれていること、私は初めて知った。詠草は四十四首出されていたが、欠席者が六名であったから、三十八名での歌会であった。

今年は、総会、歌会の部屋の中央にバイキング料理が、覆いをかけられた状態で用意されていて、料理長の料理についての説明の後さつと懇親会へと移行した。十数名が、歌会のみで帰られ、参加者は二十四名、いつもより閑散としているかと思われたが、話し合いが活発になされ、司会の田村元さんより回されたマイクで、好きな発言もなされ、お料理もおいしくて楽しめた会であった。最後に、横浜市歌を合唱し、散会となった。



野口秀樹総料理長

●新春歌会に出席して——俵谷晴子

新春歌会は、馬車道十番館四階の会場で、今年も総会に引き続き開催された。

出詠歌は四四首。うち欠席者六名。山本登志枝氏の司会で始められた。第一批評は席順に、数名を区切ったの第二批評は、三枝むつみ、桜井健司、高尾文子、新田由美子、後藤恵市、嵯峨直樹の各氏が担当。

・うるわしき沖繩しまの青空ゆさぶりて未亡人製造機オスプレイ飛ぶ

一首は「青空ゆさぶりて」の叙景の力強さ、「未亡人製造機オスプレイ」のショッキングだが端的な表現が作者の意図をよく表わしていると好評。

・集いたるうからと囲む食卓に祝箸くばり新年を祝ぐ日本人の暮らしの中にあるなんでもない風景が、あたたかく浮かび歌になる。

・またひとつ空家となりし噂たつ霜月晦日暮れなんて

社会的な現象として空家が増えているらしい。人口の減少、高齢化など、事情は同じではないだろうが、霜月晦日という季節感と、空家が呼応していると思っ



総会の議長は高尾文子さん

た。

・休日の妻がソファに寝そべって焼く前のホルモンのごとしも

お正月の歌らしくたのしく、めでたいと好評。

・バラク・オバマの二羽の折りづる翔とび立てよ七十一年前の空まで

・元朝に国旗かかげる慣ならはしを守りゆくなり昭和一桁

・過ぎ行きにけじめあらねど鐘を打ち汽笛を鳴らし年を見送る

・喜びは私たちの中にあることに気づいた 月を抱きつつ

・岩にぶつかり砂にこすれてアザラシのやうに傷付く革ジャンパーも

プリントされた四四首の詠草を、時間をかけて再読することの至福。今年こそ、今年はいい歌を一首作りたいと思うことの出来た、新春歌会だった。

[写真]

- ・真鍋正男：P3-P4
- ・田村 元：P7

# 詠草

- ・うるわしき沖繩<sup>しま</sup>の青空ゆさぶりて未亡人製造機オス  
プレイ飛ぶ 津波古勝子
- ・鉢植糸の早咲きの梅の咲きそめて睦月のひかり庭に  
満ちたり 後藤恵市
- ・風呂上りのような頬した色白の乙女初初し冬の交差  
点 伊藤美枝
- ・群雲のかかる世情に警鐘を鳴らす兜太の書に教示あり  
＊兜太＝俳人・金子兜太 田之口久司
- ・真珠湾どこにあるかと問ふときに中学生が「三重県  
です」と 平尾 眞
- ・集いたるうからと囲む食卓に祝箸くばり新年を祝ぐ  
朝井恭子
- ・松飾鏡餅など小さきを選びて春のおとづれを待つ  
杉下幹雄
- ・秋の気まといひて紅葉<sup>もみぢ</sup>葉落ちし後の桜裸木を春光つ  
つむ 中村規子
- ・顔覆ふ両手のすきにコスモスがゆれてかがやく未来  
を見せて 伊藤宏見
- ・またひとつ空家となりし噂たつ霜月晦日暮れなんと  
して 平野久美子
- ・高層の廃ビル闇をひっさげて灯の街上にずいと屹立  
す 井澤幸恵
- ・人波<sup>ひとなみ</sup>をかきわけかきわけ波女<sup>なみおんな</sup>八十路の波は難儀なる  
波 野崎美智子
- ・あたらしき心に変えん初春の部屋に伸び来し日脚見  
つけり 塚田キヌエ

- ・デバ地下の隅のすみなるスタンドにトレンチコート  
の背中みえたり 福原捷子
- ・境内に三本締め威勢よしアンパンマンの羽子板を  
買ふ 藤田絹子
- ・机の上のルーペの埃拭きいたり哀しみはまたふいに  
満ちきて 堀部知子
- ・店員が窓ガラス拭くそれだけで今日はまさしく始ま  
りており 渡部洋児
- ・「メールより葉書が好き」と子に言へば絶滅危惧種  
とヤユされてをり 竹内芳恵
- ・銀の鱗<sup>しろかね</sup>光れる鯛選り刺身に煮付いそぐ帰り路  
原 昌子
- ・検査着と素肌<sup>あひ</sup>の間に風ながれ窓のうろこ雲も順番を  
待つ 池谷しげみ
- ・しめ飾りもとめてさがす橋たもと橙めぐる鳶の指先  
高橋みずほ
- ・境内の池より鯉の一匹が宙に浮かびて水しぶきをあ  
ぐ 宮下俊博
- ・休日の妻がソファに寝そべつて焼く前のホルモン  
のごとしも 田村 元
- ・道の辺にこぼれ落ち来し柿の実をひたすらに食む子  
雀愛し 下田聰子
- ・草むらのつゆくさの花湘南のま冬の海の藍色に咲く  
土屋美代子
- ・五年日記は二年の余白を残したりあなたは何処でそ  
れを書くのか 荻谷君代
- ・バラク・オバマの二羽の折りづる翔び立てよ七十一  
年前の空まで 高尾文子
- ・塩にひらく菊花の蕉のしろたへのにひどしが苦く始  
まつてゐる 鹿取未放
- ・波の音の間合ひ鷗の声響き残照消へゆく奈呉の海の  
辺 岩井幸代

- ・狂ひ咲きと言へどもその花序整ひて霜月を咲く姫女  
苑の花 河北笑子
- ・鉢の中に泳ぐ金魚の流す涙水に紛れて泡となるらん  
小南紀子
- ・術後五年吾娘辞退するも今月も贈る梅干しとうめ  
んにくを 松本嘉猷
- ・良くなっている人悪くなっている人ダメになったま  
まの星 嵯峨直樹
- ・元朝に国旗かかげる慣<sup>ならはし</sup>を守りゆくなり昭和一粒  
長谷川静枝
- ・浮かびつつ流るるもみぢ川底のとりどりの影引き連  
れながら 山本登志枝
- ・ことごとく上を向く葉の月に輝り月桂樹の今捧ぐる  
手なり 三枝むつみ
- ・生徒らが走り抜けゆく冬の午後しんしんきらりとふ  
りくるものあり 新田由美子
- ・過ぎ行きにけじめあらねど鐘を打ち汽笛を鳴らし年  
を見送る 工藤こずゑ
- ・冬野なる土踏みて発つ馬車に乗りわたしは春を呼び  
出しに行く 桜井健司
- ・墓石の下へ妹は入りゆきぬ 忽ち距てられてただ立  
つ 深志聖子
- ・喜びは私たちの中にあることに気づいた 月を抱き  
つつ 吉野裕之
- ・正月の駅伝くぐる陸橋とおもいて渡る歳末の街  
俵谷晴子
- ・岩にぶつかり砂にこすれてアザラシのやうに傷付く  
革ジャンパーも 真鍋正男
- ・冬休み了へて職場に戻りをり図書室は空想の宝庫の  
やうな 高橋律子



## ■ 会員作品

### ● 渡部洋児

運不運ともに無縁に花言葉知らざるわれの前にあ  
る青薔薇<sup>バラ</sup>

都忘れが好きとう汝の目と声を想うもついに定か  
ならざり

思案なぞつゆなさざれば蘭の花を見つつ寂しむ拙  
速の文字

### ● 渡辺 謙

池の面の薄氷<sup>うすらひ</sup>見れば幼き日かかる悲しみ持ちて育  
ちき

地低く咲く薬草<sup>くすりぐさ</sup>緋の色の薄き花びら日を透かしつ  
つ

防音の窓を隔てて簾<sup>たかひら</sup>は揺れをり憂ひを払ふごとく  
に

### ● 深志聖子

叩いても叩いても止まず政権は市民を操る法をく  
り出す

戦時下に育ち戦時下に死にゆくか戦争の芽を潰し  
きれずに

いつまでも生きるかのように諦めぬ監視されない  
市民の自由

### ● 結城千賀子

しづかなる人生の風やや老いに早き身は春の渚に  
遊ぶ

をりふしに浜に影して往ける雲くもと歩むも久々  
にして

海風はいまだ寒くも掌<sup>て</sup>にすくふ砂のぬくもり春の  
手ざはり

### ● 平尾 眞

校庭にいまも立ちゐる金次郎その手の本をいつ読  
み終はる

天寿とは何歳なるかと思ひつつ茄子沈めればすぐ  
浮きあがる

エレベーター身の不自由にまざりくる若きも連れ  
てホーム階へと

### ● 松井芳子

ベランダに土くれのごとく動かぬは野の小鳥なり  
骸なりけり

昨日までは大空翔りぬしものをわが掌の上で風に  
吹かるる

名もわかぬ小鳥の骸と出合ひしを如月ひと日の悲  
しみとする

### ● 堀部知子

陽を分けて寄りくる真鴨、軽鴨の真直<sup>ますすぐ</sup>な水脈を眩  
しみにけり

朗月の夜はことさら思わるる亡きちちは晩年  
の日々を

陽だまりの角地に群れて咲きたるオオイヌフグ  
リの青の斉唱

### ● 宮下俊博

夕焼けの鴉の羽は朱と闇を交互に見せて何処へ向  
かふ

工事用のフェンスのなかの撓なる洋種山牛蒡は駅  
前に生えし

春浅き光をあびていつせいに白木蓮の羽ばたきて  
をり

●エッセイ ロビンソン・クルーソー／井澤幸恵

- ・野牡丹の紫散らし母と子の雀は翔ちぬあとは日だまり
- ・首深く羽に差し入れフラミンゴ昼眠たくて眠たくて昼
- ・負け試合に頬を濡らせる少年が坐りこみたる夏の真ん中
- ・全力疾走の青年たちよプロメテウスは神の火盗む
- ・スクラムを組みたる腕が記憶せんしびれんばかりの熱き一瞬
- ・わが父に似て冷徹な男なり『ロビンソン・クルーソー』手に重たかり
- ・ルルルとベル鳴りやまず非常口無きを知るべし第三惑星
- ・剥きだしのコンクリート壁の手ざわりの心を抱きて共に泣きたし
- ・死ぬまでは生きねばならぬ理を痰の詰まりし父みせたまう
- ・歌集本開けばちんまり母のいて歌読む声のひびきはじめる
- ロビンソン・クルーソーに父を思う。頑健な体と孤独に絶えられる精神力と気力。生き抜くという目標にむかってたゆみなく努力工夫を惜しまない人間だったから。しかし、二十五年の無人島暮らしはきついかもしれない。

本が好きだ。ことにエンターテインメント系のミステリーが。しかし、読み過ぎるとスティヴン・キングの小説世界が現実の生活にぬるりと入り込んできて、「なんで、どうして、怖い」ということが起きる。これって本当の話。

母は草書体に近い細字で原稿用紙やノートに一万首近く短歌を書写していた。詩集を読みただと詩を作っていた私の顔を見るたびに歌をひたすら読みだした。三十一文字を書き写し朗誦することで頭のなかでそれを再構築し学んでいたのだろう。私が短歌を作り始めたのを知ると岡部桂一郎氏宅に連れていった。八十代半ばまで卓に歌の本を積み、仲間の人たちと「よい短歌を読む会」を続けた。

\* \*

\*横浜歌人会ホームページのご案内

横浜歌人会のホームページでは、会の紹介や催し物の報告など、いろいろな情報を掲載しています。  
URLは次の通りです。ぜひアクセスしてください。

<http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

\*「横浜歌人会会報」第一〇〇号のご紹介

二〇一一年二月に発行された会報第一〇〇号では、特集として、歌人として長く活躍してこられた岡部桂一郎さんと草柳繁一さんにお話をうかがいました。A4判44ページの充実した一冊です。

会報はホームページからダウンロードができます。  
<http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

〔主な内容〕

特集…インタビュ

岡部桂一郎さん…動かざる樹の沈黙―戸塚の谷に根ざして  
草柳繁一さん…一冊の歌集を携えて―「胡麻よ、ひらけ」とうたいつつ

横浜歌人会会報一〇〇号を迎えて  
千々和久幸／塩野崎宏／角宮悦子



● 会員著書紹介 結城千賀子歌集『微笑』 & 『蜻蛉文』

近年相次いで二歌集を上梓、まとめてご報告することをお許し下さい。『微笑』(KADOKAWA、平成二十六年)は拈華微笑に由来し、鬱を病む家人との日々を中心に、健やかな若き日の逸話を挟み、患者数十万ともいう鬱の時代の今を詠む。制作時期の重なる『蜻蛉文』(現代短歌社、平成二十八年)は蜻蛉文の訓みに亡き人々の魂「精霊」の音を重ね、斎藤茂吉の流れを汲む「表現」主宰で父・磯幾造亡き後と変貌する時代の現在を見つめた。

\* 『微笑』自選十首

- ・ 見下ろしの交差点一斉に人動き「鬱」の字いくつ崩れゆくこと
- ・ 進退谷まるとはこれ刃を入れて二進も三進もゆかざる南瓜
- ・ みづからの落葉の上に沈黙の影ながく曳き裸木は佇つ
- ・ 淡あはと海より立てばつかのまの天の微笑のごとき冬虹
- ・ 夜の風に倒れし黄菊抱きおこす恋の昔もありたる胸に
- ・ 鬱の人に触覚のごときものありて看取れる側の心をはかる
- ・ 此度はかりは言はせてもらふと枯枝に開き直りし百舌が高鳴く
- ・ 一本の燐寸が黒く身を反らし炎に自らの燃え尽くる

まで

- ・ 再たの春 地震の記憶も年輪に秘めてみちのくの樹々芽吹かむか
- ・ 鬱の人の微笑は木端のみほとけの笑みにてあるいは吾への顔施

\* 『蜻蛉文』自選十首

- ・ 水無月の夕べしづかに仄明りあぢさゐは死者の一掬のみづ
- ・ 紫しきぶの珠実つぶら実父逝きて三年しづかに思ひ出みのる
- ・ こんなにも空は青きか山顛に仰ぎて息にその蒼を吸ふ
- ・ 菜の花の黄の絵手紙はいわきより「春」の一字が少しころんで
- ・ 大津波の地を旅人としてゆく痛み砂の渚は塩に緊まれる
- ・ 寄せ来たり渚に水泡うちひろげまた還りゆき海となる波
- ・ 生くるとは諦念などとしをらしきことを思はずバサと傘ひらく
- ・ 戦中と戦後行き合ふ八月の湧く雲の涯て秋兆す空
- ・ この国を見届けませう 呟きて白髪の婦人横顔しづか
- ・ 蜻蛉は風ある宙にとどまれりかそけき翅のひかり澄むまで

編集後記

- ・ 昨年の観月会は平成28年10月16日にKKRポートヒル横浜にて開催されました。詠草参加は38名でした。
- ・ 本年の新年歌会・総会は平成29年1月29日に恒例の馬車道十番館にて開催されました。詠草参加は44名でした。
- ・ 本年の文学散歩・即詠歌会は平成29年5月19日に「野島公園散策」を実施。報告は次号の会報に掲載します。
- ・ 会員の皆様で、歌集を上梓された方は、自選十首と説明文(23字×28行)を左記後藤宛てお送りください。会報に掲載させて頂きます。
- ・ 本会報に併せて新年度の名簿を配付します。名簿への登載を希望されない方は、編集人までお申し出下さい。(K・G)

横浜歌人会会報第一一六号

- 発行日 二〇一七年五月二十日
- 編集人 後藤 恵市
- 発行人 吉野 裕之
- 発行所 横浜歌人会
- URL <http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>
- 振替口座 00230-0-52137 (名義 横浜歌人会)
- 制作 アトリエ云／印刷 啓文社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。

